

第1学年 算数科学習指導案

場 所 1年教室
授業者 T1
T2

1 単元名

「ひきざん」

2 単元の目標（学習指導要領）

A（2）加法、減法（下線は本時と関わる）

（2）加法及び減法に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（ア） 加法及び減法の意味について理解し、それらが用いられる場合について知ること。

（イ） 加法及び減法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすること。

（ウ） 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算が確実にできること。

（エ） 簡単な場合について、2位数などについても加法及び減法が確実にできることを知ること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア） 数量の關係に着目し、計算の意味や計算の仕方を考えたり、日常に生かしたりすること。

3 指導の立場

（1）題材観

この単元で大切なことは、10より大きい数から1位数を引くとき、被減数を「10とあと幾つ」と捉えて、既習の計算に帰着させていくことである。本単元では、この被減数を「10とあと幾つ」と数を分解する見方を活用して、被減数の10から減数を引いて残りをたす「減加法」（ひくたすほう）と、被減数の一の位の数の「幾つ」に着目して、「幾つ」を引いてから減数の残りの数（まだ引けていない数）を10から引く「減々法」（ひくひくほう）の2つの計算の仕方を考えたり説明したりすることができるようにしていく。

児童は、今までに、20までの数について、1位数は幾つと幾つに数を分解できること、11～19までの数は「10とあと幾つ」に分解できることを学習している。また、「たし算」の単元では、被加数や加数を「あと幾つで10（になる数）」と捉えて、10の補数（10にするための残りの数）が幾つになるか考えて、被加数や加数を分解すれば、10のまとまりとあと（残り）幾つになることから、くり上がりのあるたし算も、既習の内容で計算できることを理解してきている。これらの学習を通して、和が「10とあと幾つ」になるという見通しをもち、10のまとまりがつくれるように被加数や加数を分解したり合成したりすればよいことが分かり、これらを用いて計算の仕方を考えたり説明したりしてきた。

本単元では、10と幾つから1位数を引くとき、これらを「たし算」の計算とは逆の考え方で捉えて、被減数を「10とあと幾つ」に分解できれば、1位数と1位数の既習の減法の計算が活用できることに気付かせて、問題解決の方法を考えたり筋道立てて説明したりできるようにしていく。また、本時の12-3のように、減数が小さい場合や減数が被減数の一の位の数に近い場合は、10のまとまりからではなく、被減数の幾つから引いた方が簡単に計算できることにも気付かせて、計算の仕方を考えたり説明させたりしていきたい。

（2）児童の実態と指導の方向

本学級の児童は、「算数の学習が楽しい」という児童が多く、学習内容に興味を示し、意欲的に取り組むことができている。今までの学習で、計算の仕方を考える場面では、話しながらブロックを操作したり、丸図をかいてそれを指し示したりしながら、自分の考えを表現したり仲間と確かめたりすることにも取り組んできた。これらの活動に繰り返し取り組んできたので、問題解決には、具体物を使うと考えやすいという感覚は身に付いており、具体物を用いて考え方を確かめるといった習慣も定着してきている。

今までの学習では、計算の仕方を考える場面で、問題場面からブロックや丸図の数量を正確に表し、問題場面を想起して短い文で話しながら、ブロックや丸図のどこから、何個、どのように（どちらの方

向に)動かしたのかが分かるように表現することを意識させて、話したり比べたりして、考えを深めるようにしてきた。ブロック操作では、示している数を指や手を使って囲ったり、話しながら動かしたりすることを意識させてきた。聞く側には、自分の操作の仕方との相違点を見るように、繰り返し指導をしてきた。また、ノートに考え方をかく際には、丸図のどこから何個をどのような順序で加えたり取ったりしたかが分かるように、ブロックの動かし方を想起して、手で囲ったところを同じように長丸で囲ったり、動かした方向を矢印でかいたりするなどの工夫をして、考え方を分かりやすく伝える意識も高めてきた。

児童は、立式して答えを求める問題では、すぐに答えを求め、答えを書くことに意識がいきがちになる傾向がある。しかし、学年が低いうちから、このように、立式をして答えを求める場面も含め、理由を話すことが大切だという指導を繰り返していくことで、根拠を明らかにして説明しようとする意欲を高め、自分の言葉で自信をもって話すことができる児童の育成につなげていきたいと考えている。そのためには、問題文を丁寧に読み解いて、数量の増減が分かる言葉を探して、立式の理由につなげる話し方を確立することや、ブロック操作や丸図でかくなどの具体的操作につなげることで、自分の考えを確かめたり仲間の考えと比べたりする場を設定していくなどを繰り返し指導していくことで、自信をもって自分の考えを豊かに表現できる児童の育成につなげていきたいと考えている。

4 研究内容とのかかわり

【研究内容1】単元構成の工夫改善

○計算の仕方を考えたり説明したりするための手立て(「たし算」と「ひき算」の単元をつなげて)

本単元の計算の仕方の考え方で大事となるのは、被減数を「10とあと幾つ」、被減数や減数を「幾つと幾つ」に分ける数の分解と、「あと幾つ(幾つと幾つ)で10」(10の補数)という10の合成という数の見方である。これは、「たし算」の単元の1位数と1位数のくり上がりのあるたし算で、答えが10より大きい数になることから、被加数や加数を「あと幾つで10になる」や「幾つと幾つ」とみる考え方を活用するので、「ひき算」と共通した数の見方をしているといえる。これらのことから、計算の仕方や考え方で共通することがらを考えて、「たし算」と「ひき算」の2つの単元を通して、つなげて指導していくことを意識して指導内容を考えることとした。

①意識させたい見方・考え方(キーワード)の活用

2つの単元を通して大事にしたい数の見方は「10とあと幾つ」と「あと幾つで10になる」(10の補数)「幾つと幾つ」である。「(○は)あと△(幾つ)で10」「○と△で10」「10のまとまり」「10と(あと)□(幾つ)」これら4つのキーワードを使って、計算の仕方を考えたり説明したりできるようにする。キーワードカードをつくって提示することで、これらの言葉を活用することを意識するようにしてブロック操作をしたり、丸図をかいて説明したりする。また、ブロック操作や丸図で考えたことを式につなげて説明する際には、式の数を分解してさくらんぼの図に示し、数を分解した部分→「(○は)あと△(幾つ)で10」「○と△で10」、10のまとまりをつくる部分→「○と△で10」「10のまとまり」、10より大きい数を表す部分→「10と(あと)□(幾つ)」この4つのキーワードを使って説明して、さくらんぼの図や式にもキーワードで表した部分分かるように枝分けをつくったり数を合わせて囲ったりして考えをつなげるようにしていく。

キーワードを意識してブロック操作や丸図をかくことをしたり、式に数を分解して計算する方法を書き入れたりすることで、それぞれの考えをつなげて、具体的操作が計算につながっていることを実感できるように指導していきたい。

②単元指導計画での位置付け

単元を通して、1単位時間ごとにキーワードをどのように活用するかを見通して、付けたい考え方や表現を位置付ける。また、これを基にして、数をどのように分解したり合成したりして計算するのかがキーワードを活用して表現できるようにしていく。これらを活用して、キーワードを用いて考えたり表現したりすることを繰り返し指導することで、大事にしたい考え方は、数をたしたり引いたりするときには「10のまとまりを考える」、10より大きい数は「10とあと幾つとみる」という考え方であるということを定着させていきたい。

【研究内容2】授業展開の工夫改善

①自己解決につながる課題の設定

本時は、「1パック（10個）とばら2個の12個のたまごから3個使う」場面から、 $12-3$ を想起して、「どの卵から使うか」から「ここから引くと計算しやすい」ところに着目して、計算の仕方を考えていく。そのため、具体物を示しながら問題の提示を工夫していく。計算の仕方を考えることにつながるために、具体的な場面を示すことで、「まず、2つ取ってから、次に1つ取る」という考えは、具体的操作につなげやすい。しかし、具体的操作で「12個の2を引いて、残りの1個を10から引いている」ことを、式で「減数3を分解して計算している」とは捉えにくい子がいることが予想される。「2個とってから、1個取る」ことを「減数を分解して（2引いて1引く）2回引いた」ことにつなげられるように、「ひいてからもう一度ひいた」を「ひくひく」と表現して→ブロックや丸図で「（ばらから）とる（10のまとまりから）とる」、「2回引いた」→「引く数を分けた」につなげられるようにする。

本時の学習は、課題提示のあとすぐに自力解決していくことは難しいと予想される。具体的な問題提示をすることで、それまでの「減加（ひくたす）法」の計算とは違い、本時は2回に分けて引く「減々（ひくひく）法」になることが分かり、「2回引くのは、どの数をどのように2つに分けて引いているのかを考える」ことを課題として共通理解をして、ブロック操作や丸図でかいたことをさくらんぼの図を用いた式の考え方につなげていけるようにしたい。

②学び合う場の設定

個人追究の場では、問題場面を「ゆで卵を3個作る」場面を設定して、どのように3個を取り出すのかを考えて、ブロック操作や丸図をかいて答えを求めることにつなげていく。卵を3個使うとき、「まず、ばらの2個を取り、次に、残りをパック（10個）の中から1個とる」という手順を、計算の仕方の考えにつなげていけるようにしたい。ブロック操作や丸図を使って計算の仕方を説明するときには、「まず」「次に」の言葉を使って説明することで、数をどのように2つに分けて、どの順で引いて計算したのかが分かるようにする。

ペア交流、全体追究の場では、「まず」「次に」の順番プレートを用いて計算した順を示しながら、短い文で順序だてて説明することができるようにする。ブロックや丸図を用いて計算の仕方を交流したり発表したりする際には、「①まず、幾つを引いたのか」、「②次に、いくつを引いたのか」を①②の順で色分けして示したり丸図に長丸などで囲ったり矢印をかいたりして考え方を比べる。「数の分け方」や「計算の順序」の2つについて、それぞれの考え方を比べることを通して、互いに共通する部分を捉えていく。どちらの方法でも同じ考え方で計算をしていることの理解を深めて、式で計算することやさくらんぼの図にどのように表したらよいかを確認して、問題解決の方法をより確かなものにして、一般化につなげていきたい。

また、ペア交流では、自分の考えを相手に伝えるのではなく、自分の考えを話し、ペアの相手がそれを聞いてブロック操作をしたり丸図を示したりする方法で、互いの考えを確かめ合う活動にすることにした。こうすることで、仲間の考えをより深く聞こうとすることができ、正しく操作などをするために、考えを確かめながら答えの求め方にたどり着くことができると考える。また、操作などをしながら自分の考えと比べて聞くこともできるので、ペア交流がより深い学びとなり、互いの意識を高める有意義な活動になると考えた。

③活用の場の設定

「問題1」では、減数を2回に分けて引く「減々法」は、1回目の差が0で2回目の計算が $10-1$ の簡単な計算になることから、減数を工夫して分解してから計算すると簡単に答えを求められるという「減々法」のよさを実感できるようにする。ブロック操作や丸図をかいて減数を2つに分ける計算の仕方を学ぶことで、「減加法」以外にも、数を分解して、簡単に計算できる方法があるということを理解させていきたい。

全体追究では、ブロック操作や丸図をかいて計算の仕方を確認した後に、減数をどのように2つの数に分けるのか、どこからどの数を引いたのか、などを確かめながら、式にさくらんぼの図や数をかき入れて計算することで、「減々法」の計算の仕方の一般化を図っていきたい。

「問題2」でも同様に、減数を2つに分けて、2回引く「減々（ひくひく）法」で計算をする。 $13-4$ は $3-4$ はできないので、まず $3-3$ をして、次に $10-1$ の計算になることを確かめる。「減々法」は、1位数と1位数同士の数にあまり差がないときに、計算しやすい方法である。あとほんの少しを10から引けばよいという感覚が身に付くように、「10のまとまりから、あと〇引けばよい」という見方を定着できるように声掛けすることで、「減々法」の計算の仕方の一般化を図っていきたい。

6 単元指導計画

★単元の目標

10 幾つから1位数を引いて差が1位数になる減法について、10と幾つとみる見方などに着目して、計算の仕方を考え計算することができる。

★主な見方・考え方

既習の数の見方（10 幾つを10と幾つとみる）に着目して、ブロックや丸図を用いて既習の方法で計算の仕方を見付け、それを基にして他の計算も発展的に考えることができる。

| 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
|--|---|---|
| 10 いくつから1位数を引いて、差が1位数になる繰り下がりのある減法の計算の仕方を理解し、計算することができる。 | 被減数を「10といくつ」とみる見方に着目し、繰り下がりのある減法の計算の仕方を考え、説明している。 | 繰り下がりのある減法の計算を用いて身の回りの問題を解決するなど、減法を生活や学習に生かそうとしている。 |

★単元の評価規準

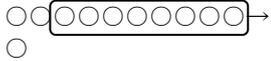
| 時 | ねらい | 主な学習活動 | 指導・援助 ◎大切にしたい考え方 ■個に応じた手立て |
|---|--|---|--|
| 1 | 10 幾つから1位数を引いて、差が1位数になる計算の仕方を考える数学的活動を通して、被減数を「10と幾つ」に分けられることに気づき、数を分解すれば既習の計算で答えが求められることに気づき、くり下がりのある計算の仕方を考え、順序立てて説明することができる。 (減加法) | <p>問題1 こうえんに13にいました。9にかえりました。なんにんのこっていますか。</p> <p>1 問題場面を把握し、課題づくりをする。</p> <p>課題 10 いくつの いくつからひけないときの ひきさんの けいさんの しかたを かんがえよう。</p> <p>2 個人追究で、ブロックや図を使って、ひき算のけいさんの仕方を考える。 ・13は10と3に分けると計算しやすいことを確認する。→「13は10と3」(キーワード) (1) ブロックで考える ・はじめに、10の中から9取ります。残りの1と3を合わせて、4になります。 (2) 図で考える 10のまとまりから9取ります。次に、残りの1と3を合わせて4です。 ○○○○○○○○○○○→ ○○○</p> <p>3 ペア交流で、互いの考えを交流する。 ・計算の仕方(考え)を話す子とその話を聞いてブロックを操作したり、丸図をかいたり指さしたりする子と役割を分ける。 ・ペアの子が話したことをもう片方の子がブロック操作や丸図を指し示して確かめる。 ・役割を交代して交流する。 ・互いの考え方で似ているところや違うところを話す。</p> <p>4 全体追究で、10 幾つのどこから9を引いたのかを確かめて、ブロック、図の考え方を比べ、$13-9$の計算の仕方を確認する。</p> <p>5 【うり問】で、計算の仕方をより確かなものにする。</p> <p>問題2 $15-9$のけいさんのしかたをいみましょう。</p> <p>6 学習をまとめる。</p> <p>まとめ 10 いくつを10といくつにわけて、10からひいて、のこりとばらをたせばよい。</p> | <p>◎「13の3から9は引けない」ことから、ブロックや丸図で被減数を「10と幾つ」に分けて提示することで、10からひけばよいとことに着目できるようにして、課題化を図る。</p> <p>■答えまで求められない児童には「3から9はひけない」や「10から3をひいた後はどうすればいいか」というヒントを与えて答えを導けるようにする。</p> <p>◎ひいてからたしていること →ひくたす法(減加法)を確認する。</p> <p>①10から減数をひく。 ②①の差と「幾つ」を合わせる。 →①で「ひく」②で「たす」の計算をしたことを確認する。</p> <p>■相手の考えをペアの子がブロックで操作したり丸図を指さしたりして交流するようにすることで、相手の考えの理解を深める。 ・ブロックと丸図の考えをつなげることで計算の仕方を確かめる。</p> |

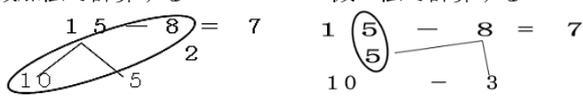
①自分の考えづくりをする時間

【評価規準】

◆思考・判断・表現◆

被減数を「10と幾つ」とみる見方に着目し、繰り下がりのある減法の計算の仕方を考え、説明している。

| | | | |
|--------|---|---|---|
| 2 | <p>10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる計算の仕方を考える数学的活動を通して、被減数を「10 と幾つ」分けて、10 からひいたのこりと幾つを合わせればよいことに気づき、ブロックを操作したり丸図で表したり、さくらんぼ図をかいたりして、計算の仕方を確かめて、正確に計算することができる。 (減加法)</p> | <p>問題 1 くるまが 11 だいとまっていた。8 だいでていきました。のこりはなんだいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 11 台とまっていたで 8 台出て行ったのでひきざんになる。 ・ 式は、$11 - 8$ になる。 ・ 答えは、10 よりも小さくなる。 ・ 前の計算のやり方を使えば答えがだせそう。 ・ 11 は、10 と 1 (10 とあと幾つ) に分けて計算する。 <p>1 問題場面を把握し、課題づくりをする。</p> <p>課題 10 いくつかの いくつかから ひけないときの ひきざんの けいさんを しよう。</p> <p>2 個人追究で、ブロックや図を使って、ひき算のけいさんの仕方を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 11 を 10 と 1 に分けて計算することを確認する。 <p>(1) ブロック はじめに 10 の中から 8 取ります。残りの 2 と 1 を合わせて 3。</p> <p>(2) 図  </p> <p>3 ペア交流で、互いの考えを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 計算の仕方 (考え) を話す子とその話を聞いてブロックを操作したり、丸図をかいたり指さしたりする子と役割を分ける。 ・ ペアの子が話したことをもう片方の子がブロック操作や丸図を指し示して確かめる。 ・ 役割を交代して交流する。 ・ ひいてからたす計算であることを確かめる。 <p>4 全体追究で、前時と同様に 10 のまとまりから数を引くと答えが求めやすいことを確かめる。</p> <p>→ さくらんぼ (被減数の分解) の計算を確かめる。</p> <p>11 を 10 と 1 に分ける。 $11 - 8$ の計算の仕方</p> <p>① $10 - 8 = 2$ ② $2 + 1 = 3$ $11 - 8 = 3$</p> <p>・ ひいてからたす計算であることを確認する。</p> <p>→ ひくたす法 (減加法)</p> <p>5 【うり問】で、計算の仕方の一般化を図る。</p> <p>問題 2 ひかれるかずをわけてけいさんしましょう。 ① $16 - 9$ ② $12 - 8$ ③ $15 - 7$</p> <p>6 学習をまとめる。</p> <p>まとめ 「10 いくつか」の 10 からひいたのこりとばらをたせば、こたえがわかる。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 問題場面を具体的に示すことで、11 から 8 ひけばよいことを理解させて、立式の根拠を説明することにつなげられるようにする。 <p>◎ 前時と同様に被減数を「10 と幾つ」に分けて考えれば、答えを求めることができそうだという見通しをもたせて課題化を図る。</p> <p>■ 計算の仕方に見通しがもてないときには、前時の学習の掲示をヒントにして、ブロックや丸図を用いて、「11 は 10 と幾つに分ける」「10 からひいた後どうすればいい」などとヒントを与えて、減加法の計算の仕方を定着させる。</p> <p>■ 自分の考えを話すことができない児童には、</p> <p>① ひく数を 10 と幾つに分けます。 ② $10 - (\text{減数}) = \square$ \square と (幾つ) で答え</p> <p>の話型を示して、ブロック操作や丸図をかいて説明できるように促す。</p> <p>■ 相手の考えをペアの子がブロックで操作したり丸図を指さしたりして交流するようにすることで、互いの考えを確かめられるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ さくらんぼ図とブロックと丸図の考えをつなげることで計算の仕方を確かめる。 <p>■ 問題 2 を解く前に、被減数は「ひく数は 10 と幾つに分けられる」ことを確認して問題に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 計算が早くできたら、ブロックや丸図、さくらんぼ図などで確かめる。 <p>【評価規準】 ◆知識・技能◆ 10 いくつかから 1 位数をひいて、差が 1 位数になる減法の計算ができる。</p> |
| 3 (本時) | <p>② 習熟を図る時間</p> <p>① 自分の考えづくりをする時間</p> | <p>※ 本時の展開参照</p> <p>【評価規準】 ◆思考・判断・表現◆ 被減数の一の位の数に合わせて減数を分解し、被減数の一の位の数から順番に計算する方法が分かり、ブロックや丸図を用いて説明している。</p> | |

| | | | |
|----------|---|--|---|
| <p>4</p> | <p>10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる計算の仕方を考える数学的活動を通して、計算しやすいように被減数または減数のどちらかを分解すればよいこと気づき、減加法または減々法を選んで、計算をして答えを求めることができる。 (減加法と減々法)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">②習熟を図る時間</div> | <p>問題1 どんぐりが 15 ありました。そのうち 8 こをつかいました。のこりはなんこですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 15 個あって、8 個使う。8 個減る。式は $15 - 8$ ・ 2 つのどちらの計算方法を使えばいいかな。 <p>先に 10 のまとまりから 8 引くよ。 先に 5 を引いて、残りを 10 から引くといい。</p> <p>1 問題場面を把握し、課題づくりをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto;"> <p>課題 10 のからひくか 1 のばらからひくかをきめてけいさんしよう。</p> </div> <p>2 個人追究で、計算の仕方を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ブロック、丸図を使って考える。 ・ 減加法で計算する ・ 減々法で計算する  <p>3 ペア交流で、互いの考えを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 計算の仕方(考え)を話す子とその話を聞いてブロックを操作したり、丸図をかいたり指さしたりする子と役割を分ける。 ・ ペアの子が話したことを、もう片方の子がブロック操作や丸図を指し示して確かめる。 <p>4 全体追究で、どちらの方法でも計算できることを確認してどちらの方法でも計算できることの理解を深める。</p> <p>5 【うり問】で、計算の仕方の一般化を図る。</p> <p>問題2 計算しましょう。 ① $13 - 6$ ② $16 - 8$ ③ $15 - 6$</p> <p>6 学習をまとめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto;"> <p>まとめ かずをわければ、10 からでも、1 のばらからでもひきざんができる。</p> </div> | <p>◎減数を「10 のまとまりから引く」(減加法)か「1 のばらから順番に引く」(減々法)かどこからひくかを考えて問題解決に見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 減加法、減々法のどちらで計算をしてもよいことを確認する。 ■ $15 - 8$ の計算の仕方が想起できない児童には、ブロックや丸図を 10 と 5 に分けたものを提示して、8 はどこから取るか、操作させて、計算の仕方に見通しがもてるようにする。 ■ 自分の考えを話すことが出来ない児童には、ひき算の計算の仕方の話型を使って順番に話すことができるように助言する。 ・ キーワードを活用して話している児童を価値付け、大切にしたい考え方の定着を図る。 ■ 見通しがもてない児童には、ブロックなどの具体物を提示して、まず、どこから数をひくかを確かめて、答えを求められるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto;"> <p>【評価規準】 ◆知識・技能◆ 10 いくつから 1 位数をひいて、差が 1 位数になる減法の計算を減加法や減々法でできる。</p> </div> |
| <p>5</p> | <p>10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる計算を、計算カードを用いての習熟を図る数学的活動を通して、答えが同じになるカードや、カードの並び方のきまりに気づき、考えたことを交流することができる。 (減加法と減々法)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">②習熟を図る時間</div> | <p>問題1 カードをつかって、れんしゅうしましょう。</p> <p>1 問題場面を把握し、課題づくりをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto;"> <p>課題 けいさんカードをつかって、くりさがりのあるひきざんのれんしゅうをしよう。</p> </div> <p>2 個人で、計算カードを練習する。</p> <p>3 ペア交流で、問題を出し合い、計算の習熟を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 答えが同じになるカードを見つける。 ・ 気付いたことを交流する。 <p>4 全体追究で、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 答えが同じカードで気付いたことを交流して、数の並び方のきまりを見つける。 <p>5 【うり問】で、計算の習熟を図る。</p> <p>問題2 けいさんカードを使って、ビンゴゲームをしよう。</p> <p>6 学習をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 取組の様子を振り返り、計算の習熟について自己評価をする。 ・ 取組の様子から具体的な姿を価値付け、これからの計算カード練習への意欲につなげる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 丁寧に、正確に取り組んでいた児童を価値付けて、速さよりも正しく計算できることを指導していく。 ■ 正確に計算できない児童には、ブロックを「10 と幾つ」に分けて提示して、減数を「10 からひく」のか「(減数) からひくのか、計算しやすい方を選ばせて、計算に見通しをもてるようにする。 ■ ペア交流では、実態に合わせて、人数を増やして小グループにするなど、気が付いたことの交流をしやすい形態の工夫をする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto;"> <p>【評価規準】 ◆知識・技能◆ 10 いくつから 1 位数をひいて、差が 1 位数になる減法の計算が確実にできる。</p> </div> |

| | | | |
|---|--|--|--|
| 6 | <p>10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる計算の習熟を図る数学的活動を通して、減加法や減々法の計算のきまり気付、これらを用いて正確に計算することができる。 (減加法と減々法)</p> <p>②習熟を図る時間</p> | <p>問題 1 カードをつかってれんしゅうしましょう。</p> <p>1 問題場面を把握し、課題づくりをする。</p> <p>課題 けいさんカードをつかって、10 いくつからひく けいさんを せいかくにできるようにしよう。</p> <p>2 個人で、計算カードを練習する。 3 ペア交流で、問題を出し合い、計算の習熟を図る。 ・11-2、11-3 のようにカードを順に並べたときに答えが同じになるカードを見つける。 ・気付いたことを交流する。 4 全体追究で、 ・答えが同じになるカードを並べて気付いたことを交流して、被減数と減数との関係を見つける。 5 【うり問】で、計算の習熟を図る。</p> <p>問題 2 けいさんカードを使って、「おおい(すくない)ほうがち」のゲームをしよう。</p> <p>6 学習をまとめる。 ・取組の様子を振り返り、計算の習熟について自己評価をする。 ・取組の様子から具体的な姿を価値付け、これからの計算カード練習への意欲につなげる。</p> | <p>・丁寧に、正確に取り組みでいた児童を価値付けて、速さよりも正しく計算できることを指導していく。</p> <p>■正確に計算できない児童には、前時までの計算の仕方を確認して、ブロックや丸図など具体物を提示して、どこからひくかを考えるように促して、計算の仕方の定着を図る。</p> <p>【評価規準】 ◆知識・技能◆ 10 いくつから 1 位数をひいて、差が 1 位数になる減法の計算が確実にできる。</p> |
| 7 | <p>基本的な学習内容を理解しているかを確認し、それを習熟する。</p> <p>②習熟を図る時間</p> | <p>課題 いままでに べんきょうした やりかたをつかって、ひきざんの けいさんをせいかくにやろう。</p> <p>1 10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる減法の計算方法の理解 2 10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる減法の計算の習熟 3 10 幾つから 1 位数を引いて、差が 1 位数になる減法の適用 4 10 幾つから 1 位数を引いて、差が 10 未満になるかの判断</p> | <p>【評価規準】 ◆知識・技能◆ 10 いくつから 1 位数をひいて、差が 1 位数になる減法の計算ができ、それを用いて問題を解決することができる。</p> |

7 内容の系統性

〈本単元〉

